



TITLE:

GL $_p$ -bundle の非可換幾何(非線型可積分系の研究の現状と展望)

AUTHOR(S):

浅田, 明

CITATION:

浅田, 明. GL $_p$ -bundle の非可換幾何(非線型可積分系の研究の現状と展望). 数理解析研究所講究録 1994, 868: 136-148

ISSUE DATE:

1994-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/83969>

RIGHT:

GL_p -bundle の非可換幾何

信州大学理学部 浅田明 (Akira Asada)

次の微分幾何の問題は, 可積分系と関係が深い.

(i) (行列値)1-形式 θ が $g^{-1}dg$ と書ける条件を求めよ.

(ii) (行列値)2-形式 Θ が $d\theta + \theta \wedge \theta$ と書ける条件を求めよ.

M を polarization E を持つ Hilbert 空間, I_p を M の線形作用素の作る p -Schatten ideal とする時, (i), (ii) の非可換版は

(i)' I_p の値を取る K が $g^{-1}[E, g]$ と書ける条件を求めよ.

(ii)' I_p の値を取る R が $EK + KE + K^2$ と書ける条件を求めよ.

となる. (i), (ii) の (局所) 解を非 Abel Poincaré 補題と呼んでいるので ([2], [1] 参照), (i)', (ii)' の解は非可換 Poincaré 補題と呼ぶ事にする.

以下では非可換 Poincaré 補題を中心に, GL_p -bundle の非可換幾何的取扱について話す. これは前回の研究会での話 ([3]) の続きだが, 前回話した非可換特性類は, GL_p -bundle は U_1 -bundle に同値な事実証明出来たので必要なくなった. これについて

も報告する.

1. 群 GL_p , 環 gl_p と非可換形式

\mathcal{H} を polarization $\varepsilon = P_+ - P_-$ を持つ Hilbert 空間, $B(\mathcal{H})$, $GL(\mathcal{H})$, $U(\mathcal{H})$ を, それぞれ \mathcal{H} の有界線形作用素の作る環, 逆を持つ有界線形作用素の作る群, Unitary 作用素の作る群とする. \mathcal{H} の compact 作用素の全体 I_c は $B(\mathcal{H})$ の唯一つの極大 ideal だが

$$I_p = \{T \in B(\mathcal{H}) \mid \sum |(Te_n, e_n)|^p < \infty, \text{ ある } O.N\text{-basis } \{e_n\} \text{ に対して}\}$$

も ideal で p -Schatten ideal と呼ばれる. 定義から $p > q$ なら

$I_p \subset I_q$ だが, 更に

$$(1) \quad I_p^2 = I_{p/2}$$

である. ε と I_p を用いて

$$gl_p = \{T \in B(\mathcal{H}) \mid [\varepsilon, T] \in I_p\},$$

$$GL_p = \{T \in GL(\mathcal{H}) \mid [\varepsilon, T] \in I_p\},$$

$$U_p = GL_p \cap U(\mathcal{H})$$

とおく. $T \in GL_p$ の時 $|T| \in GL_p$ となるから, GL_p を構造群とする paracompact 空間上の fibre bundle (GL_p -bundle) は U_p を構造群とする bundle と同値である.

$P_+ \mathcal{H} = \mathcal{H}_+$, $P_- \mathcal{H} = \mathcal{H}_-$ とすれば, 直和分解 $\mathcal{H} = \mathcal{H}_+ \oplus \mathcal{H}_-$ により,

$T \in B(\mathcal{H})$ は $T = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$ と $(2, 2)$ -行列の形に書ける.

$$T^d = \begin{pmatrix} a & 0 \\ 0 & d \end{pmatrix}, \quad T^0 = \begin{pmatrix} 0 & b \\ c & 0 \end{pmatrix} \text{とした時}$$

$$\varepsilon T = T \varepsilon \Leftrightarrow T = T^d, \quad \varepsilon T = -T \varepsilon \Leftrightarrow T = T^0$$

となる.

$$(2) \quad \delta_+ T = \{\varepsilon, T\} = \varepsilon T + T \varepsilon, \quad \delta_- T = [\varepsilon, T] = \varepsilon T - T \varepsilon$$

と書く事にする. $\delta_+ \delta_- = \delta_- \delta_+ = 0$ である.

定義 $T_{i_0 i_k}, T_{i_0}, \dots, T_{i_k} \in \mathfrak{gl}_p$ の時

$$\sum T_{i_0 i_k} \delta_- T_{i_0} \delta_- T_{i_k}$$

の形の元を非可換 k -形式 (非可換 k -次微分形式) と呼ぶ.

定義から非可換 k -形式 $\in I_p^k$, 特に非可換 2-形式 $\in I_{p/2}$ である

補題 1, $\delta_- (2k\text{-非可換形式}) = (2k+1)\text{-非可換形式}$,

$$\delta_+ ((2k+1)\text{-非可換形式}) = (2k+2)\text{-非可換形式}$$

注意 より精密に, 次が成立する.

$$\{\text{非可換 } 2k\text{-形式}\} / I_p^{2k+1} = (I_p^{2k} / I_p^{2k+1})^d$$

$$\{\text{非可換 } (2k-1)\text{-形式}\} / I_p^{2k} = (I_p^{2k-1} / I_p^{2k})^0.$$

2. 非可換接続と非可換曲率

$\xi = \{g_{uv}\}$ を多様体 M 上の GL_p -bundle とする.

定義 I_p の値を取る (連続, 又は可微分) 関数の集まり $\{K_u\}$ が

$$(3) \quad (\varepsilon + K_u) g_{uv} = g_{uv} (\varepsilon + K_v)$$

を満す時, ω の非可換接続, 又 $\{R(K_u)\} = \{R_u\}$

$$(4) \quad R(K_u) = \varepsilon K_u + K_u + K_u^2$$

を, $\{K_u\}$ の(非可換)曲率と言う.

$\{u\}$ に関する $(C^\infty\text{-級})$ 1 の分割を $\{e_u\}$ とした時

$$K_u = \sum e_w g_{uw}^{-1} [\varepsilon, g_{uw}]$$

とおけば (3) をみたすから

補題 2 M が paracompact な Hilbert 多様体の時, M 上の GL_p -bundle は非可換 1-形式に値を取る非可換接続を持つ. 特にと U_p -bundle であれば, Hermite 作用素の値を取る非可換 1-形式の非可換接続を持つ.

系 同じ仮定で, ω は Id_p に値を取る非可換曲率を持つ.

尚非可換接続, 非可換曲率の形式的性質は通常の接続, 曲率 (gl_p に値を取る 1-形式と 2-形式) と同じである ([3]).

3. 非可換 Poincaré 補題, I. 局所問題.

最初に, 比較の爲非 Abel Poincaré 補題に関する結果をまとめておく ([2]).

行列値微分形式 $\phi = \sum \phi_{i_1 \dots i_p} dx_{i_1} \wedge \dots \wedge dx_{i_p}$ に対し

$$I\phi = \sum I(\phi)_{i_1 \dots i_{p-1}} dx_{i_1} \wedge \dots \wedge dx_{i_{p-1}}$$

$$I(\phi)_{i_1 \dots i_{p-1}} = \int_0^1 t^p \sum_{j=1}^m x_j \phi_{j, i_1 \dots i_{p-1}}(xt) dt$$

$$I_\theta(\phi) = I(\theta \wedge \phi), \quad P_\theta(\phi) = \sum_{n=0}^{\infty} I_\theta^n(\phi)$$

とおく. 但し θ は行列値 1-形式である. この時

$$dP_\theta(\phi) = \theta \wedge P_\theta(\phi) + P_\theta(d\phi - I((d\theta + \theta \wedge \theta) \wedge P_\theta(\phi)))$$

が成立する. 特に $d\theta + \theta \wedge \theta = 0$ 或 $\theta = g^{-1}dg$ と (局所的に) 書ける為の必要十分条件で g は $P_\theta(1)$ (1 は単位行列) で与えられる ([1] 参照). これは 1-次元非 Abel Poincaré 補題である.

2-次元非 Abel Poincaré 補題 (曲率形式の候補者を与えて接続形式を求める問題) は次の様に述べられる.

1-形式 ϕ と p -形式 β に対し

$$J_\phi(\beta) = (-1)^{p-1} P_\phi(1)^{-1} (-1)^{p-1} P_\phi(I(P_\phi(1)\beta))$$

とおく. 1-形式 β と 2-形式 α に対し

$$T \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} - J_\beta \left(D \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} \right), \quad D \begin{pmatrix} \alpha \\ \beta \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} d\alpha + [\beta, \alpha] \\ \alpha - (d\beta + \beta \wedge \beta) \end{pmatrix} \quad \begin{matrix} J_\beta(\alpha) = J_\beta(\alpha) \\ J_\beta(\beta) = J_\beta(\beta) \end{matrix}$$

とおいた時, すべての n について

$$T^n \begin{pmatrix} \oplus \\ \theta_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \oplus \\ \theta_n \end{pmatrix}$$

がなりたてば, $\lim \theta_n = \theta$ が存在して $d\theta + \theta \wedge \theta = \oplus$ となり, 逆も正しい.

非可換 Poincaré 補題は, Hermite 作用素の値を取る, I_p -値関数 K と R に対してだけ保られているので, 以下その事を仮定

する.

定理 1. (i) K が (非可換) 平坦, $\varepsilon K + K\varepsilon + K^2 = 0$, とする. ε の必要十分条件は U_p の値を取る関数 g が存在して

$$(5) \quad K = g^{-1}[\varepsilon, g]$$

と (局所的に) 書ける事である.

(ii) $R = \varepsilon K + K\varepsilon + K^2$, K は I_p の値を取る関数, と書ける ε の必要十分条件は次の (a), (b) である.

(a) $I + R$ は positive 作用素になる.

$$(b) \quad [\varepsilon, R] \in I_p^2$$

K が平坦なら $(\varepsilon + K)^2 = I$ となり, $K(x) \in I_p$ から $\varepsilon + K(x)$ は ε と同じ spectral 型を持つ. 従って (i) は次の補題 3 に帰着する.

補題 3. ε_u が ε の polarization の値を取る関数なら, 局所的に ε_u と同じ regularity を持つ, unitary 作用素の値を取る関数 h_u があって $\varepsilon_u = h_u^{-1}\varepsilon h_u$ と書ける. 更に $\varepsilon + \varepsilon_u$ が mod. I_p で逆を持てば, h_u は U_p に値を取る. 但し $\varepsilon_u \in \mathcal{O}I_p$ とする.

証明 (藤井一幸氏に与る). $\varepsilon_u(x)$ と ε の spectral 型が等しいから, $\varepsilon_u(x_0) = \varepsilon$ と仮定して良い. $\eta = \frac{1}{2}(1 + \varepsilon\varepsilon_u)$ とおくと $\eta(x_0) = 1$, $\varepsilon\eta = \eta\varepsilon_u$ だから, η が逆を持つ範囲で $\varepsilon_u = \eta^{-1}\varepsilon\eta$ である. 又 $\eta^*\varepsilon = \varepsilon_u\eta^*$ だから

$$\eta\eta^*\varepsilon = \eta\varepsilon_u\eta^* = \varepsilon\eta\eta^*$$

である. 従って $(\eta\eta^*)^{1/2}$ も ε と交換し

$$h = (\eta\eta^*)^{-1/2} \eta$$

は unitary, $h^{-1}\varepsilon h = \eta^*(\eta\eta^*)^{-1/2}\varepsilon(\eta\eta^*)^{-1/2}\eta = \eta^*(\eta\eta^*)^{-1}\varepsilon\eta = \eta^*(\eta\eta^*)^{-1}\eta\varepsilon_u = \varepsilon_u$

となって前半が得られる. 後半は $\varepsilon_u = h^{-1}\varepsilon h$ の時

$$[\varepsilon, \varepsilon_u] = \varepsilon h^{-1}\varepsilon h - h^{-1}\varepsilon h \varepsilon = \varepsilon h^{-1}(\varepsilon h - h \varepsilon) + h^{-1}\varepsilon(\varepsilon h - h \varepsilon)$$

$$= (\varepsilon + h^{-1}\varepsilon h) h^{-1}(\varepsilon h - h \varepsilon) = (\varepsilon + \varepsilon_u) h^{-1}[\varepsilon, h]$$

から解る.

$R = \varepsilon K + K \varepsilon + K^2$ なら $I + R = (\varepsilon + K)^2$ だから $I + R$ は positive である.

逆に $I + R$ が positive の時 $I + R = \sum \lambda_i P_i$ と spectral 分解出来 $\lambda_i \geq 0$ である. 符号の不定性を残したまま

$$(I + R)^{1/2} = \sum \pm \sqrt{\lambda_i} P_i$$

と書く. $K = (I + R)^{1/2} - \varepsilon$ と置けば $R = \varepsilon K + K \varepsilon + K^2$ だから, $K \in I_p$

となる様 $I + R$ の固有値の平方根の符号を定める事が問題である.

(b) から $I + R$ の固有値は有限個を除いて, $I + R^d$ の固有値の擾動として定められ, $I + R^d$ の固有値の平方根の符号は

$I + R^d$ と ε が同時対角化されるから, ε から定められる.

この時 $\sum |\lambda_i - 1|^p < \infty$ から $\sum |\sqrt{\lambda_i} - 1|^p < \infty$ となる事により, $K \in I_p$

が得られる. 尚この議論から $\varepsilon K + K \varepsilon + K^2 = \varepsilon K' + K' \varepsilon + K'^2$ なら

$$(6) \quad K' = eK, \quad e = I - 2P, \quad P \text{ は有限次元空間への射影}$$

となる.

4. 非可換曲率の性質

[3] で述べた様には, $\{K_u\}, \{R_u\} = \{R(K_u)\}$ を \mathcal{U}_p -bundle 上の Hermite 非可換接続, 及び曲率とする時, 次の (a), (b) が成立する.

(a) $I + R_u(x)$ が致る所逆を持たなければ, \mathcal{U} は trivial である.

(b) $R_u(x)$ が I_q の値を取れば, \mathcal{U} は \mathcal{U}_q -bundle と同値である ($p > q$ とする).

(a) は補題 3 と \mathcal{H} の unitary 作用素の群が可縮という Kuiper の定理から導かれる. (b) は摂動論の Rellich-Kato の定理から, 任意の x の近傍で \mathcal{H} の射影の値を取る連続 (又は可微分) 関数 P_T で

$$P_T \mathcal{H} = \ker(\varepsilon + K_u(x)) \oplus \{\varepsilon + K_u(x) \text{ の } + \text{ 固有空間} \}$$

となるものの存在が言え, この事と補題 3 から得られる.

(b) と補題 2 から次の定理が得られる

定理 2. Paracompact 多様体 (又は C^∞ -smooth 多様体) 上の GL_p -bundle は位相的 bundle (又は可微分 bundle) として, \mathcal{U}_1 -bundle と同値である. 特に非可換接続, 非可換曲率としては, trace を持つものを取り得る.

5 非可換 Poincaré 補題 II, 大域問題

M は paracompact, 位相的 bundle の時, C^∞ -smooth (C^∞ -級の 1 の分割を持つ, paracompact な Hilbert 多様体なら充分), 可微分 bundle の時, とし K , R は M 上連続, 又は微分可能な Hermite 且 I_p の値を取る関数とする. ことわらないうち, 以下表われる関数は K , R と同じ regularity を持つとする.

定理 3. K が M 上で $\varepsilon K + K\varepsilon + K^2 = 0$ をみたせば

$$K = g^{-1}[\varepsilon, g],$$

となる M から U_p への関数 g が存在する.

証明 Local には $K = g_u^{-1}[\varepsilon, g_u]$ と書ける.

$$(fg)^{-1}[\varepsilon, fg] = g^{-1}\{f^{-1}[\varepsilon, f]g + g^{-1}[\varepsilon, g]\}$$

から $C_{uv} = g_u g_v^{-1}$ とおくと, $\{C_{uv}\}$ は M 上の $U(\mathcal{H}_+) \times U(\mathcal{H}_-)$ -bundle を定める. 従って Kuiper の定理から $C_{uv} = h_u^{-1} h_v$, $h_u: U \rightarrow U(\mathcal{H}_+) \times U(\mathcal{H}_-)$ と書け, $h_u g_u = h_v g_v$, $(h_u g_u)^{-1}[\varepsilon, h_u g_u] = g_u^{-1}[\varepsilon, g_u]$ 故に定理が得られる.

R が定理 1, (ii) の (a), (b) をみたせば, 局所的に

$$R = \varepsilon K_u + K_u \varepsilon + K_u^2, \quad K_u = (I + R)^{\frac{1}{2}}_u - \varepsilon,$$

と書け, $(I + R)^{\frac{1}{2}}_u = e_{uv} (I + R)^{\frac{1}{2}}_v$ とおけば

$$e_{uv} = I - 2P_{uv}, \quad P_{uv} \text{ は有限次元空間への射影}$$

となる. $I+R$ が M 上 open dense な集合で, 単純固有値 λ を持たなければ $\{e_{uv}\}$ は (幾分) 可授になるが, M 上の Hermite 且 I_p の値を取る関数 S を取って $I+R+TS$ が $T>0$ で定理 1, (ii) の (a), (b) をみたし, M の open dense な集合で, 単純固有値 λ を持たない様出来るから, $\{e_{uv}\}$ は可授と仮定して良い. この時 $e_{uv}(\alpha)$ は \mathbb{Z}_2^∞ (\mathbb{Z}_2 の無限直和) の元と思えるから, $\{e_{uv}\}$ は \mathbb{Z}_2^∞ -係数の M 上の Čech 1-cycle を定める. そうすれば標準的な議論で次の定理が得られる.

定理 4. $\{e_{uv}\}$ の定める $H^1(M, \mathbb{Z}_2^\infty)$ の元は R だけで定まる. この元を $\circ(R)$ と書くと $\circ(R) = 0$ が $R = \varepsilon K + K\varepsilon + K^2$ と M 上で書ける層の必要十分条件である. 特に $H^1(M, \mathbb{Z}_2) = \{0\}$ であれば, R は常に M 上で $\varepsilon K + K\varepsilon + K^2$ と書ける.

6. 非可換 Poincaré 補題と U_p -bundle の不変量

$\mathcal{U} = \{g_{uv}\}$ を M 上の U_p -bundle とし, $\{R_u: \mathcal{U} \rightarrow I_p, \text{ 且 Hermite}\}$ は, 各 $R_u(\alpha)$ が定理 1, (ii) の (a), (b) をみたし

$$(7) \quad g_{uv}^{-1} R_u g_{uv} = R_v$$

となるものとする (\mathcal{U} 上の関数として連続又は可微分).

もし $(I+R_u)^{\frac{1}{2}}$ は, $(I+R_u)^{\frac{1}{2}} - \varepsilon \in I_p$, 且

$$(8) \quad g_{uv}^{-1} (I+R_u)^{\frac{1}{2}} g_{uv} = (I+R_v)^{\frac{1}{2}}$$

となる様取れば, $K_u = (I+R_u)^{\frac{1}{2}} - \varepsilon$ は

$$(9) \quad g_{uv}^{-1} K_u g_{uv} + g_{uv}^{-1} [\varepsilon, g_{uv}] = K_v$$

をみたすから、 $\{K_u\}$ の非可換接続になる。

実数 t が $0 \leq t \leq 1$ の時 $\{tR_u\}$ も $\{R_u\}$ と同じ性質を持つ。もし $(I+tR_u)^{1/2} \in I_p$ と

$$(I+tR_u)^{1/2} - \varepsilon \in I_p, \quad g_{uv}^{-1} (I+tR_u)^{1/2} g_{uv} = (I+tR_v)^{1/2}$$

となる様取れば、

$$K_{u,t} = (I+tR_u)^{1/2} - \varepsilon,$$

とあって、 $\{K_{u,t}\}$ は $\{K_u\}$ の非可換接続であり、 $\lim_{t \rightarrow 0} K_{u,t}$ は平坦になるから $\{K_u\}$ は trivial になる。 $I+tR_u(x)$ の spectre 分解は

$$I+tR_u(x) = \sum (1+t\lambda_i(x)) P_i, \quad I+R_u(x) = \sum (1+\lambda_i(x)) P_i,$$

だから、もし $1+\lambda_i(x) \neq 0$ なら、 $(1+t\lambda_i(x))^{1/2}$ の符号は $(1+\lambda_i(x))^{1/2}$ の符号から定められる。特に $\{R_u\}$ が $\{K_u\}$ の非可換曲率で $I+R_u(x)$ が常に逆を持つば、 $\{K_u\}$ が trivial になる事がこの事から解る。

$1+\lambda_i \geq 0$ なら $1+t\lambda_i \geq 0$, $0 \leq t \leq 1$, だから、 $I+R_u(x)$ が 0-mode を持つても $I+tR_u(x)$, $t < 1$, は 0-mode を持たない。この場合、 $(I+tR_u)^{1/2} - \varepsilon \in I_p$ となる $(I+tR_u)^{1/2}$ は、 R_u が非可換曲率であっても、その非可換接続からは定められない。しかし

$$(10) \quad (I+tR_u)^{1/2} = e_{uv} g_{uv} (I+tR_v)^{1/2} g_{uv}$$

$e_{uv} = I - 2P_{uv}$, P_{uv} は有限次元空間への射影

は成立し、 e_{uv} は t に無関係に取れる。又 $(I+tR_u)^{1/2}_a$ も $(I+tR_u)^{1/2}_a - \varepsilon \in I_p$ をみたせば

$$(11) \quad (I + tR_u)^{\frac{1}{2}}_a = \varepsilon_u (I + tR_u)^{\frac{1}{2}}$$

$\varepsilon_u = I - 2P_u$, P_u は有限次元空間への射影

となる.

(10), (11) から次の cocycle 関係と同値関係が導かれる.

$$(12) \quad e_{uv} g_{uv} \cdot e_{vw} g_{vw} \cdot e_{wu} g_{wu} = 1,$$

$$(13) \quad \{e_{uv}\} \sim \{\varepsilon_u^{-1} e_{uv} g_{uv} \cdot \varepsilon_v g_{uv}^{-1}\}.$$

ここで, $\{e_{uv}\}$, $\{\varepsilon_u\}$ の交換関係は

$$(14) \quad e_{uv} e_{uw} = e_{uw} e_{uv}, \quad e_{uv} g_{uv} e_{wx} g_{wx} = g_{wx} e_{wx} g_{wu} e_{uv}$$

$$(15) \quad \varepsilon_u e_{uv} = e_{uv} \varepsilon_u, \quad \varepsilon_u g_{uv} \varepsilon_v g_{vu} = g_{uv} \varepsilon_v g_{vu} \varepsilon_u$$

である. 尚 $\{g_{uv}\} \in \{h_u^{-1} g_{uv} h_v\}$ に取りかえると

$$\{e_{uv}\} \rightarrow \{h_u^{-1} e_{uv} h_v\}, \quad \{\varepsilon_u\} \rightarrow \{h_u^{-1} \varepsilon_u h_u\}$$

と変る.

上記を定式化する爲, Z_2^∞ を (定理4と同じ議論をして), R_u と可換な有限次元射影を用いて表現すれば $g_{uv}^{-1} Z_2^\infty g_{uv}$ は R_v と可換な有限次元射影による Z_2^∞ の表現である事を注意する. この事からきによって twist された Z_2^∞ の層 $Z_2^\infty(\xi)$ が出来, $H^1(M, Z_2^\infty(\xi))$ がきだけで定まる. (12), (13) から $\{e_{uv}\}$ から $H^1(M, Z_2^\infty(\xi))$ の元 $\circ(R)$ が定まる. 尚交換関係 (15) から, きが non-trivial の時, $B^1(\mathcal{U}, Z_2^\infty(\xi))$ はかなり小さくなる.

Z_2^∞ は discrete だから R が parameter s に連続的に依存している時 $\circ(R)$ は不変である. 特に $\{R_u\}$ としてきの非可換曲率を取

れば、非可換曲率全体の集合は弧状連結だから $o(R_{\mu\nu})$ は ω だけで定まる。従って次の定理が得られる。

定理 5. $\{R_{\mu\nu}\}$ を ω の非可換曲率とすれば $o(R_{\mu\nu}) \in H^1(M, \mathbb{Z}_2^{\infty})$ は ω だけで定まる。この元を $o(\omega)$ とすれば $o(\omega) = 0$ となる必要十分な条件は ω が trivial な事である。

$o(\omega)$ からより計算しやすい不変量を導く事は今後の問題である。尚この研究の主な部分は昨年(93年) Bologna 滞在中出来た。滞在の機会を承えて頂いた Vaz Ferreira 教授と CNR, 及び程々討論した Almeida 教授に感謝します。

文献 (尚 [3] の引用文献参照)

- [1] Almeida, P.: A direct approach to one variable noncommutative calculus, *Port. Math.* 46 (1987),
 ————: Calcul explicite de l'holonomie (上記の resumé, 3 p).
- [2] Asada, A.: Non Abelian Poincaré Lemma, *Lect. Notes Math.* 1209 (1986), 37-65
- [3] Asada, A.: 非可換接続と超対称性, *数研研議究金録* 822 (1993), 70-83
 ————: Non-commutative geometry of GL_p -bundles, preprint 42 p).

尚非可換幾何の標準 model への応用について最近次の論文が発表された。

- Kastler, D.: A detailed account of Alain Connes' version of the standard model in non-commutative geometry, I, II,
Rev. Math. Phys. 5 (1993), 477-532, Várilly, J.C.-Gracia-Bondía, J.M.: Connes' noncommutative
 differential geometry and the standard model, *J. Geo. Phys.* 12 (1993), 223-301.